Ⅲ

モデル
プログラム

第１開発部会（東海村）学習プログラムについて

テーマ
　Ｅ　公民館・市民センター等の活性化のための支援プログラムの開発と普及策
（公民館・市民センター等職員の資質向上）

１　テーマの背景

公民館等は，指定管理者制度による行政以外の事業者による運営や，行財政改革等の影響で貸し館業務に特化した形態が増加するなど，社会教育施設として本来的に求められている機能が十分に発揮されていない現状がある。

職員一人一人が，行政の責務としての社会教育に携わるために，職員として専門的な知識や技能を習得することが喫緊の課題である。

２　モデルプログロムについて

(1) モデルプログラム名

「総合的な企画力の向上を目指して」

(2) 目的

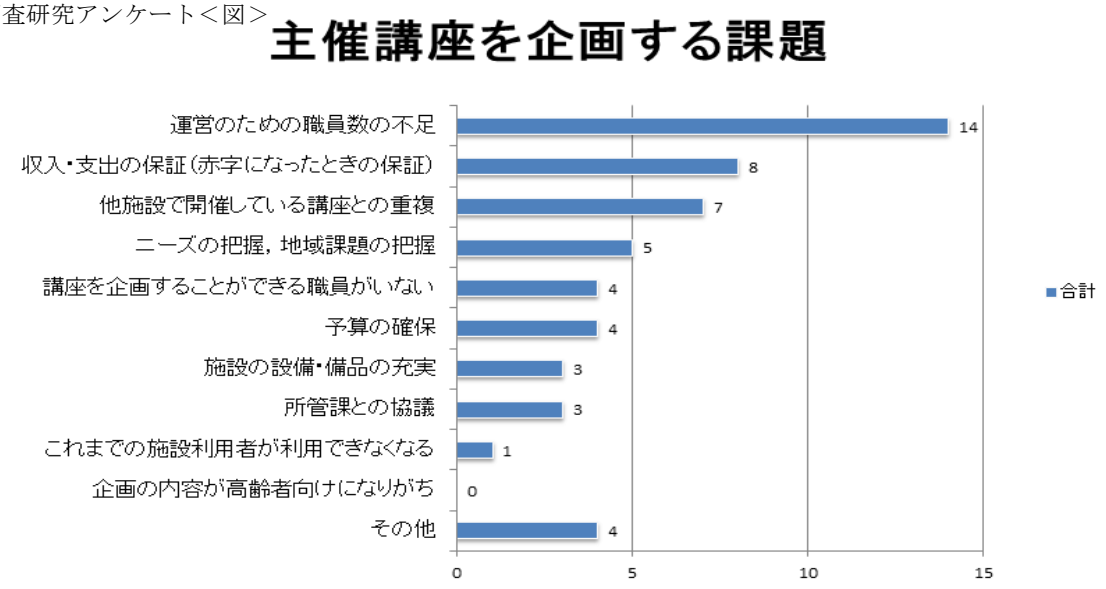
公民館等職員に求められる能力は，幅広い情報の中から社会的課題や地域課題(※)を適切に把握したり，自主活動グループの活動活性化と育成強化を図ったりすることである。このためには総合的な企画力を高めることが肝要である。また，ファシリテーションとは，「容易にする」「手助けする」「促進する」等の意味で幅広い概念であり，一般的には，人々の活動が容易にできるよう支援し，うまくことが運ぶよう舵取りすることと定義されている。社会教育施設を運営するうえでも基礎的な素養である。職員はネットワーク構築やプレゼンテーションなどの総合的な企画力が必要で，単なる事務処理ではなく公民館主事としての能力発揮が期待される。併せて，地域で活動している住民団体のファシリテーションスキルの向上を目指す。

※「地域課題」とは，多くの住民が共通に直面しているが，個人での解決は不可能で共同の取組みで解決可能な生活課題

(3) アンケート調査から

県内市町村公民館・市民センター等に標記テーマにかかわるアンケートを実施した。

調査研究アンケート＜図＞



調査研究アンケート＜表＞

「あなたの施設で講座企画を行っていく際に，企画担当者にとってこれからさらに身に付けておく必付けておく必要があると考える知識や能力等」

情報収集力	・市民のニーズを捉える　・地域の要求や現代的課題を認識する
企画力	・集めた情報を活用する能力　・アイディアを整理する能力 ・時代や地域にあったニーズの把握の仕方及び企画の仕方
伝達力	・魅力的なチラシ作成能力　・ブログやＨＰ等作成技能 ・ＳＮＳの活用法　・わかりやすく説明する能力
ファシリテート力	・場をつくり人をつなぐ　・意見を引き出し整理しまとめる能力 ・コミュニケーション能力

調査研究アンケート＜図＞から，主催講座を企画するために，職員数不足，収支の保証，他施設との講座重複などの課題が多くあげられた。この件については，本事業の学習プログラム開発では解決できない内容であり，今後市町村の対応となる。そこで，ニーズや地域課題を把握できていない，講座企画力のある職員がいないなどの課題に焦点を当てて開発していく。

また，公民館・市民センター等職員が講座を企画するために必要な知識や能力等について，４つの項目に分けて調査した結果，調査研究アンケート＜表＞のような回答であった。市民のニーズを捉える力，集めた情報を活用する能力，魅力的なチラシを作成する能力，わかりやすく説明する能力，意見を引き出し整理しまとめる能力等が必要であることから，職員の資質向上のためにそれらの内容で学習させる学習プログラムを開発していきたい。

(4) 実施方法等

対象	公民館職員，地域課題と直接関わっている方（自治会，社会教育委員，こども会育成会，PTA役員，福祉関係団体，体育協会，文化協会　等）
会場	東海村中央公民館等
広報	チラシ・案内文書を市町村公式ＨＰや広報誌に掲載する。また，関係各課長・各団体長宛に案内文書を送付する。
学習成果を地域に還元するために考えられる手だて	・公民館等の職員ばかりではなく，地域課題に関わっている団体の役員等も参加対象者とする。 ・座学ばかりではなくワークショップ形式の講座とすることにより，それらの手法を各団体に戻って活用できるような構成とする。

(5) モデルプログラム展開案

回	テーマ・内容	時間	備考
１ ～ ３	「ファシリテーションスキルの養成」 ～情報収集力，コーディネート力の向上～ ・ファシリテーションとは ・住民の主体性の引き出し方 ・活動力アップの具体的手法	各回 ２．５	・第１～３回の全３回講座で１つのパッケージとする。
４	「魅力的な活動とは」 ～企画力の向上，効果的なチラシづくり～ ・今日的課題など住民のニーズを捉える方法 ・クライアント（対象者）の絞り方 ・受講することで享受できる利益（メリット）の明確化 ・講座やイベントの開催案内等のレジュメ作成のポイント	２．５	・団体主催イベントや講座の構成について，誰もが参加したいと思うような魅力ある内容にする手法を習得する。
５	「情報発信力のブラッシュアップ」 ～情報発信の実態と改善方策～ ・講座開催，構成員募集，イベント開催などのために作成したチラシと，講師が改善したチラシの比較検討 ・従来の方法で作成したチラシを，ワークショップ形式で話し合い，魅力的なチラシにグレードアップ	２．５	・広報媒体（チラシ，ＨＰ等）の強みや弱さ等を理解し，それぞれの媒体に応じた周知・広報を行えるようにする。 ・情報を発信するためのルールや技能を習得する。

(6) 期待される効果

公民館職員が社会教育施設としての総合的なスキルアップを図ることで，公民館活動の活性化が図られる。また，地域の団体の活動が活発化し，人づくり，絆づくり，地域づくりへと波及効果・相乗効果による濃密な人間関係の醸成が期待される。

第２開発部会（牛久市）学習プログラムについて

テーマ
　Ｆ　地域課題に対応するための支援プログラムの開発と普及策（少子・高齢化）

1　テーマの背景

日本の高齢化率は，2013 年には 25%を超え，2025 年には 30%に達するという試算も出ている。また，14 歳以下の人口割合も，2025 年には 10%にまで下がると予想されている。

（総務省資料「国勢調査」および「人口推計」より）

牛久市では，全体の人口が増加しているのに対し，牛久市東部の奥野地区では人口が減少し続けている。東部で唯一の牛久第二中学校は生徒数が 100 人を切り，少子化も進んでいる。今後高齢化率が高まり，ますます少子化が進む中，高齢者が地域社会の担い手となって活躍することは，自身の生きがいとなるだけでなく，地域課題の解決や活気ある社会づくりにもつながる。少子・高齢化の進行と人口減少に直面している多くの市町村同様，奥野地区でも，地域の担い手の育成・確保を課題としている。そこで，将来の地域の担い手である子どもたちが，地域を担っている大人や高齢者とともに活動するしくみづくりが求められている。

2　モデルプログラムについて

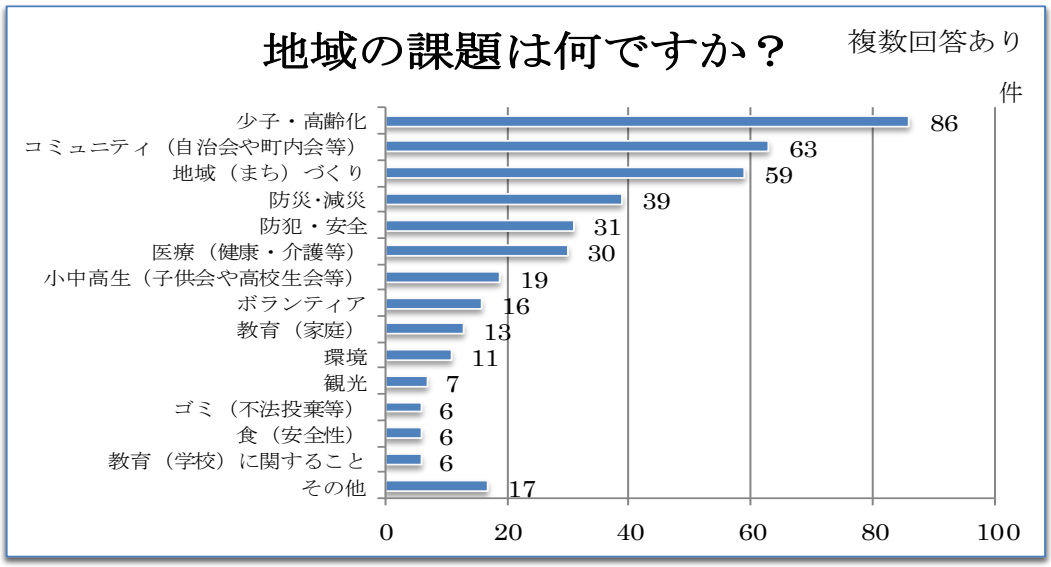
(1) モデルプログラム名

「楽しく学んで，地域を元気に！～日曜子ども教室をとおして」

(2) 目的

地域の方が，将来の担い手となる地域の子どもたちを育成する。また，子どもたちが高齢者を含む地域の方との交流を図り，高齢者が子どもたちのために生き生きと活躍できる地域の活性化を図る。

(3) アンケート調査から



県内市町村公民館・市民センター等に標記テーマにかかわるアンケートを実施した。「あなたの施設がある地域の課題は何ですか。」

全 147 件回答中，「少子・高齢化」が 86 件で一番多い結果となっている。

このことから，本モデルプログラムにおいて少子・高齢化について検討することは，全県的なニーズのある課題に取り組んでいるといえる。

(4) 実施方法等

対象	小・中学生・保護者・地域の方
会場	牛久市立奥野小学校　等
広報	・チラシ（案内）にて広報（牛久市立奥野小学校・牛久市立牛久第二中学校には児童生徒数で配付）
学習成果を地域に還元するために考えられる手だて	・研修会に多くの地域の方々に参加してもらうことにより，今後の「おくの日曜カッパ塾」の活動につなげていく。 ・講座を通して，子どもたちが地域の方とふれあうことにより，将来の地域を担おうとする気持ちを醸成する。

(5) モデルプログラム展開案

（地域づくりに関する研修会『交流会』）

1	時間	２時間程度
	講師等	地域課題（少子・高齢化）に取り組む団体等
	対象者等	地域の方
	経費	未定
	定員	未定

（日曜子ども教室の講座の企画）

2	時間	未定
	講師等	スポーツアスリートによる教室，科学体験等
	対象者等	地区の小中学生
	経費	未定
	定員	未定

（日曜子ども教室の人材確保への支援）

3	時間	随時
	講師等	
	対象者等	地域の方
	経費	未定
	定員	

おくの日曜カッパ塾年間計画

月	講座
4	自然観察会①
5	プログラミング教室①
6	折り紙教室①
7	理科教室① プログラミング教室②
8	
9	自然観察会②
10	読み聞かせコンサート
11	折り紙教室②
12	料理教室
1	プログラミング教室③
2	理科教室②
3	お茶会(更生保護女性会)

(6) 期待される効果

・地域の教育力が向上する。

・子どもたちが，地域の方々や異学年の児童生徒と交流し，地域における人間関係を育むことで，地域の良さを知り，将来の地域の担い手となる機運を醸成できる。

・地域の高齢者が子どもたちと関わり，生き生きと活躍できる。

第１普及部会（水戸市）検証プログラムについて

テーマ 　Ｃ　公民館・市民センター等の活性化のための支援プログラムの開発と普及策 （青少年教育／ジュニアリーダー育成）

１　モデルプログラム名（公民館・市民センター支援）

Youth 育成プログラム　「若い力でわくわくワーク」

２　モデルプログラムに至る経緯(現状と課題)

○　一般的に，中学校は部活動を実施しており，休日でも行事を行いにくいが，当地区は，ジュニアリーダーの活動が以前より行われており，学校や地域育成指導者の理解がある。

●　青少年に対する教育活動という事柄について，どのようなものを行えば良いのか漠然としており，公民館や市民センター等では人的な問題も含め，取り組み事例が少ない。

３　モデルプログラム展開例

(1)　目的

地域の次世代を担う青少年と地域の拠点と成り得るべく公民館や市民センター等で行える，青少年の活動を中心とした学習プログラムを開発・提供することによって，青少年の生きる力を高めるとともに，地域との関わりも強化させる。同時に，公民館や市民センター等の職員も含めて，青少年に対する教育活動に係る事業に対して，更なる意識の向上を図る。

(2)　対象者

・ 市民センター長（第１回）
・ 市民センター区内の中学生（希望者）（第２回～第７回），または高校生

(3)　開催時期，曜日，時間帯　等

休日，夏季休業日等　※但し，第１回の市民センター長向け講座は，平日午前の会議中

理由：第１回は市民センター長が集まる会議内に講座を実施するのが効果的である。

第２回以降は，生徒休業日。

(4)　内容（平成 30 年度水戸市で実施の場合）

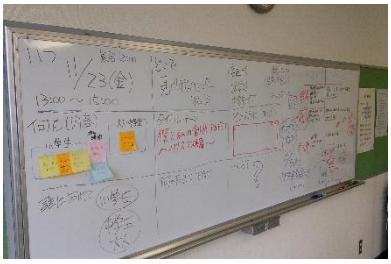
ア 市民センター長向け講座「地域の力が絆をつくる」

・　成田浩一氏による講話（約１時間）

イ「ミッション イン ミガワ ポッシブル」の実施

見川市民センターが中心となって，公民館活性化のため，中学生・高校生と一緒にプログラムを企画した。事前に５回の打ち合わせを重ね，みがわ生涯学習フェスティバル（11 月 23 日実施）の会場において，クラフト（小物づくり）コーナーを開設した。

ア）事業の流れ

期日等	内容	備考
５月 25 日（金） 会場：見川市民センター 13：30～	関係者打ち合わせ 全体スケジュールの決定	参加：生涯学習課（市民センター，みと好文カレッジ，青少年育成係），県生涯学習センター，地区青少年育成会
６月 11 日（月）	市民センターで作成したチラシを，見川中学校で配布	定員 20 名のところ，参加者２名（後に１名辞退）
７月 17 日（火）	見川中学校の給食時に校内放送で PR，チラシを再配布	
７月 26 日（木） 会場：見川市民センター ９：30～	第１回プロジェクト会議 参加者顔合わせ，事業説明	参加：上記にくわえ，参加する中学生，高校生サブリーダー
９月 15 日（土） 会場：見川市民センター ９：30～	第２回プロジェクト会議 実施する内容の協議 	何をやりたいか案を挙げてから，案に対するメリット，デメリットを話し合って，実施する内容を決めた。 
10 月３日（水） 会場：生涯学習センター 17：00～	臨時プロジェクト会議 （準備，リハーサル）	①サンプル品の作成 ②各工程の見直し，修正 ③当日の，ジュニアリーダー参加を学校に依頼
10 月 20 日（土） 会場：見川市民センター 9：30～	第３回プロジェクト会議 当日準備	①サンプル品の作成 ②速やかに作業に取り掛かれるよう，１人分ずつ紙粘土やビーズを小分け

		③実際に，会場にテーブルを並べレイアウトを決定
10 月 26 日（金）	広報と一緒に，生涯学習フェスティバルのチラシ配布	見川地区： 2,260 世帯
11 月 9 日（金）	小学校に，プログラムのチラシ配布	見川小学校　：539 名 梅が丘小学校：821 名
11 月 17 日（土） 会場：見川市民センター 9：30～	第４回プロジェクト会議 当日準備	ぬり絵　原画をコピー30 枚 缶バッチ　台紙の切り出し 60 枚 紙粘土　サンプルづくり　60 セット ビーズ　サンプルづくり　60 セット
11 月 23 日（祝日） 会場：見川市民センター 12：00～ 15：30 	「みがわ生涯学習フェスティバル」にて事業実施 	 中学生，高校生もスタッフとして参加

イ）「みがわ生涯学習フェスティバル」での実践

タイトル　：僕と私の創作アカデミア～クリスマス編～

企画参加者：中学生１名，中学生ジュニアリーダー４名，高校生サブリーダー４名

当日参加者：約 150 名

【実施メニュー】

	内容	実績
紙粘土アート	紙粘土で小物（ケーキや，クリスマスツリー）を作成する。	62 セット
ビーズアート	細い針金にビーズをとおして，クリスマスカラーのブレスレットを作成する。	45 セット
オリジナル缶バッジ作成	自分で描いたイラストを使って，オリジナル缶バッチを作成する。	58 個
塗り絵	高校生サブリーダーが原画を担当した塗り絵を体験する。	15 枚

紙粘土アート

開催当日は，多くの親子連れで賑わいました。

ウ）事業を実施して

実績として約 150 名が参加したが，親子での参加が目立った。

なお，小物づくりは「１人１個」を明記しないと，１ 人が何回もチャレンジして終わらないことがわかった。

※講座を運営するにあたって工夫した点

・事前に各講師，市民センター長，市教委，水戸生涯担当で２度の打ち合わせ実施

・月に１回のペースで講座（会議）を計画

・プロジェクト会議は，基本的に企画・準備・運営は中学生が行う。

・プロジェクト会議の運営等で，市内高校生（サブリーダー）のメンバーを活用

・親子連れの参加が目立った。

・今回のプログラムは，無料，事前申込も不要とした。

4　成果と課題

＜成　果＞･･･モデルプログラムを実施した事による成果を記載

○　中学生向け勧誘チラシを市民センターで作成することで，主体的な活動につながる。

○　第１回市民センター長向け講座後に，次年度実施に意欲を示した方がいた。

＜課　題＞･･･モデルプログラムを実施しての問題点(浮き彫りになったもの)

●　日程は，前年度のうちに計画と当該の学校や地域への説明をはじめること。

学校との事前調整が重要

年度途中からのスタートであったため，学校との連携が深まらなかった。

※地域に精通している大人で，事業に協力してくださる方がいると良い。

●　中学生への協力依頼（協力校）をどの地域でも行うことができるか。

●　中学生のスケジュール調整が難しい。（部活動等のため）学生は試験や部活動があるので，前年度のうち，学校の意見を取り入れて修正が効く段階で，企画に対する学校の意見や，どこまで協力をいただけるかを相談することが重要だと感じた。

●　市民センターの職員数が少ないため，企画によっては過度な負担がかかる場合がある。

第２普及部会（高萩市）検証プログラムについて

テーマ
　Ｄ　学校と地域が連携・協働していくためのプログラムの開発と普及策

１　プログラム名
本気になれる子供を育てる地域の本気～学校と地域の連携・協働～

２　モデルプログラムに至る経緯（現状と課題）
○　当地区は，以前から学校と地域とのつながりがあり，多くの地域の方の協力を得て，学校行事や子供会活動などの取組が続いている。
○　今年度から学校運営協議会が設置されていることもあり,地域側を巻き込んだ連携･協働の推進が期待できる。
●　体験活動に参加したいと思っている地域の方も多くいるが，参加するきっかけがなかなかみつからない。また，どのような活動をやっているのかわからない。
●　学校運営協議会の委員も含め，地域で子供たちを育てていくという当事者意識が薄いように思われる。

３　モデルプログラム展開例
(1) 目的
　学校と地域が，目指す子供像を共有し，一体となって子供たちの豊かな成長を支える活動に取り組むことをとおして，社会全体で子供を育てる意識の醸成を図る。また，その活動に多くの地域住民や団体等の参画を促し，緩やかなネットワークを形成することで，学校と地域の連携・協働体制の確立と活動の継続性の確保につなげることを目的とする。

(2) 対象者
　中学校区の教職員（保幼小中），保護者，学校運営協議会委員，地域住民・団体，５・６年児童（希望者）

(3) 開催時期・曜日・時間帯
　第１回：５月中，第２回：夏季休業日，第３回：夏季休業日の休日，
　第４回：授業参観日
　理由：第１回の学校運営協議会は，目指す子供像の共有を早めに行うため，年度当初に実施した。具体的な活動内容を検討する研修会は，地域と学校側の熟議による意見共有を行うため，比較的時間の調整がしやすい夏季休業中に実施した。連携の手立ての１つとなる野外宿泊体験活動は，ダンボール集めなど事前の準備に時間を要すること，父親たちの協力を得やすいことなどの理由から，夏季休業中の休日に実施した。活動内容を広く周知するため，授業参観日に合わせ，活動報告を実施した。

(4) 内容（平成30年度高萩市で実施の場合）

ア　小中学校学校運営協議会にて研修

事業（講座）テーマ・内容	参加者	活動報告
○小中学校運営協議会（第２回） ・講義 「学校運営協議会の役割について」 ・ワークショップ 「地域で目指す子供像について」 	・学校運営協議会委員（小中合わせて10名） ・校長，教頭，地域連携コーディネーター ・ＰＴＡ会長 ・県北事務所主任社会教育主事 ・市社会教育主事	・運営協議会の第１回は任命式と協議会規則の確認のため，第２回から実際の活動がスタートした。 ・講義では，運営協議会委員に当事者意識をもってもらう重要性を確認した。 ・ワークショップでは，目指す子供像について，グループで意見を出し合い，全体で共有した。 ・当事者意識をもって話し合ったことで，活発な意見が出された。

イ　学校と地域をつなぐ研修会

○地域と学校をつなぐ研修会 ・ワークショップ 「秋山コミュニティ・スクールにおける目指す子供像の共有」 	・学校運営協議会委員 ・保護者，地域の方 ・保幼小中職員 ・市内各校地域連携コーディネーター ・市社会教育主事	・運営協議会で話し合ったことを具現化するために，学校と地域が同じグループで話し合うよい機会となった。（話し合った内容は学校運営協議会での活動の足がかりとなった。） ・参加者の感想として，子どもたちのためにできそうなことを話し合うことができたなど前向きな意見があった。（学校と地域が一体となって子供の成長を支えるようとする意識の醸成を図る手始めとなった。）

ウ　野外宿泊体験活動（参加児童　48名）

○野外宿泊体験活動 ・ダンボールハウス ・ドラム缶風呂 ・サバイバル飯 ・キャンプファイヤー ・肝試し ・ほおずき体験 ・流しそうめん 	・５・６年生参加希望児童 ・ＰＴＡ父親委員会を中心とした保護者 ・地域の方 ・市高校生会 ・市地域おこし協力隊 ・消防分団 ・小学校職員 ・中学生	・地域や団体が緩やかなネットワークを形成していくための活動となった。（ほおずき体験では地域おこし協力隊が，肝試しでは高校生会がそれぞれ協力した。） ・参加した子どもたちの感想には「今回の野外宿泊体験はとても大変でした。協力してくれた方々の優しさを感じました。」などがあり，地域の特色を生かした活動となった。

エ　活動報告

○野外宿泊体験活動報告 ・授業参観日に「野外宿泊体験活動」の写真や感想を掲示物で報告	・児童 ・保護者	・子どもたちも保護者にも来年度への参加意欲を高めることができた。

4　成果と課題

＜成　果＞・・・プログラムを実施したことによる成果

○　野外宿泊体験活動をとおして，地域住民や団体（高校生会や地域おこし協力隊，消防団）等と緩やかなネットワーク作りをすることができた。

○　子供たちは，地域の大人と新たに知り合い，顔が見える関係となることができた。また，地域のために本気で活動する人の存在を知り，生き方を考える一助となった。

○　学校運営協議会では，目指す子供像の実現のために地域ができること等について，熟議を行った。話し合ったことを土台として，「学校と地域をつなぐ研修会」において，地域ができることについて広げたり深めたりしたことで，当事者意識の醸成につながった。

＜課　題＞・・・プログラムを実施しての問題点

●　体験活動や研修会に，より多くの地域の方・団体等に参加してもらうための広報の仕方や活動内容の工夫（チラシの配付，ダンボールハウスの審査など）

●　子供たちが主体的に活動できるようにするための仕掛け

学習プログラム（大洗町H29，茨城町H30）について

テーマ
　Ａ　公民館・市民センター等の活性化のための支援プログラムの開発と普及策
（家庭教育／子育て支援）

１　モデルプログラム名（家庭教育／子育て支援）
育てよう！　〇〇っ子　～公民館で親力アップ！～

２　モデルプログラムに至るにあたって(現状と課題)
○　市町村教育委員会では，より公民館を活性化することや家庭教育支援プログラムの改善を図りたい。
●　学校単位で家庭教育学級を実施しても，保護者の参加率が低い。
●　公民館では，家庭教育支援にかかわる保護者向け講座や活動が少ない。

３　モデルプログラムの目的
親子のコミュニケーション能力等，子育て世代の親力をアップさせるプログラムを公民館（ソフト面も含）で提供することによって，公民館を中心としての家庭教育支援体制の充実を図るとともに，波及的に子育てに関わる支援の輪を広げる。更には，公民館職員のスキルアップも図る。

４　モデルプログラム展開例１（平成29年度大洗町実施）
(1) 対象者
保護者
(2) 開催時期，曜日，時間帯　等
休日（土日・祝日）
理由：働いている保護者を参加しやすくするため。
(3) 講座内容（単発実施が可能）

回	事業(講座)テーマ	時間	講師等	備考(準備物等)	経費※は受益者負担	定員
1	家庭教育に関する講話・ワークショップ 「自らを信じる『力』」	1.0	メディアリテラシー 人権教育専門家	ＰＣ プロジェクター 配付資料	報償費 22,000円	無
2	アクセサリー製作及び子育て支援（コミュニケーションの取り方） 「世界に一つだけのアクセサリーを作りましょう」	2.5	鍛金作家 家庭教育ファシリテーター	アクセサリー材料 カフェコーナー	謝金 27,000円×２人 ＝54,000円 旅費相当額 2人で　約2,500円 ※材料費１人500円	20人
3	ワークショップ(インプロワーク) 「童心に返って遊びましょう」 ～子どもとのコミュニケーションＵＰをめざして！～	3.0	臨床心理士・スクールカウンセラー	配付資料 掲示資料 子どもの学習の場，学習支援者カフェ	報償費 24,000円	30人
4	親子の絆を深めよう！ ～野外炊さん・プロジェクトアドベンチャーから見つけ出す～ （親子参加型）	5.5	プロジェクトアドベンチャー（PA）指導者 野外炊さん指導者	野外炊さん材料（カレー） ＰＡグッズ	報償費　０円 旅費のみ 食料費・保険代 (1人800円)消耗品費 10,000円	親子15組

回	事業(講座)テーマ	時間	講師等	備考(準備物等)	経費※は受益者負担	定員
5	子育てが親育てになる ～子どもの心にふるさとを～	2.0	臨床心理士・スクールカウンセラー	配付資料 掲示資料	報償費　16,000円 旅費　　約2,500円	無

(4)　成果と課題

＜成　果＞･･･モデルプログラムを実施した事による成果

○　参加した方は，それぞれの講座の内容について良い印象をもっている。家庭教育を展開するプログラムとして，今後も今回のような内容の講座を実施することで，大変効果があるといえる。

○　事前打合せから当日まで，大洗町に足を運ぶことで学習相談機能を発揮することができた。

○　公民館のリーダーシップ力の向上については，運営では回数を重ねる毎に職員が全面に出て実施した。特に第４回のＰＡの事前研修を行ったことで、今後この手法を用いて講座を実施することが可能となった。

○　公民館と接触を持つ機会の少ない世代と公民館をつなぐことにより，地域の教育の場を中心として展開する地域の教育力そのものを向上させることに貢献できたといえる。

＜課　題＞･･･モデルプログラムを実施しての問題点(浮き彫りになったもの)

●　講座の設定については，家庭教育のプログラムを実施する場合，講座中の子どもの対応についてこれまでも検討してきたが，子どもに対して魅力ある具体的なプログラムを設けた上で，保護者向けのプログラムを用意するといったさらなる工夫が必要であると感じた。

●　親子プログラム（第４回）では，当初，小学生４～６年生を対象としていたが，第２・３回の参加者が少なかったこともあり，小学生１～６年生に修正した。実際の参加者も１～３年生が多かったので，親子プログラムで小学校の高学年を参加できる内容や方法は検討していく必要があった。

●　第２回では，講師を複数活用した。どちらも家庭教育ファシリテーターとして召集したが，講師同士のコミュニケーションや役割が重要であるため，講師同士の事前の打ち合わせが重要である。

５　モデルプログラム展開例２（平成30年度茨城町にて普及事業として実施）

(1) 普及事業にあたって

平成29度に大洗町で実施したモデルプログラムを，平成30年度は茨城町の地域課題や実情に合わせたプログラムに修正し普及に努めた。

・茨城町職員の思いや地域課題に合った学習プログラムに修正して実施

・保護者向けの講座と同時刻に子ども向け講座を実施

(2) 対象者

保護者，子育てに関心のある方，児童

(3) 開催時期，曜日，時間帯　等

休日（土日・祝日），小中学校の長期休業日

理由：子ども向けの講座を同時に実施し，保護者を参加しやすくするため。

(4) 講座内容（単発実施が可能）

回	事業(講座)テーマ	時間	講師等	備考(準備物等)	経費　※は受益者負担	定員
1	アクセサリー製作及び子育て支援（コミュニケーションの取り方） 「世界に一つだけのアクセサリーを作りましょう」	2.5	鍛金作家 山口みちよ 氏 家庭教育ファシリテーター 見澤 淑恵 氏	アクセサリー材料 カフェコーナー	謝金 27,000円×２人 ＝54,000円 旅費相当額 2人で　約2,500円 ※材料費１人500円	20人

回	事業(講座)テーマ	時間	講師等	備考(準備物等)	経費　※は受益者負担	定員
2	家庭教育に関する講話・ワークショップ 「今，聴いておかないと，きっと後悔するスマホの話」	2.0	メディアリテラシー 鈴木 宏治 氏	ＰＣ プロジェクター 配付資料	謝金　22,000円 旅費相当額1,000円	20人
3	家庭教育に関する講話（子どもへの言葉遣い，接し方） 「子育てがもっと楽しくなる魔法の方法」	2.5	臨床心理士・スクールカウンセラー 鈴木 宏子 氏	配布資料 掲示資料	謝金　24,000円 旅費相当額3,000円 託児2,000円×３人	20人

(5) 講座の様子

ア　第１回

保護者向け講座

「世界に一つだけのアクセサリーを作りましょう」

世界に１つだけのアクセサリー作りをしながら，参加者同士が褒めたり認めたりする言葉かけに気をつけながらコミュニケーションを図り，個性を認め合うことの大切さを体験するとともに，子どもとの接し方につて学んだ。

＜保護者の意見＞

・夢中になって，自分の好きなように作れた　・作品を褒められ嬉しかった

・家庭教育について考えられた

子ども向け講座

「自然災害科学実験教室」

当センターの「おもしろ理科先生派遣事業」の登録講師，Dr.ナダレンジャーとナダレンコによる，小さなお子さんでも理解できるように，具体的なさまざまな機材を使った地震や竜巻などのメカニズムや雪崩現象・液状化現象についての実験，液状化の簡易実験装置を作成した。

イ　第２回

保護者向け講座

「今，聴いておかないと，きっと後悔するスマホの話」

スマートホンによるインターネットの使い方や便利な活用方法，また使用時の危険性や注意点など，ＩＴ時代の子育てについて学んだ。

＜保護者の意見＞

・改めて危険性について考えることができた」「現代のインターネットについて，よく理解することができた

・どうして危険なのかが分かりやすかった

子ども向け講座

「風船で遊ぼう！（バルーンアート）」

当センターの「いばらきスクールサポート事業」登録講師にバルーンアート制作・体験をした。作り方を指導していただきながら，ウサギやプードル，花などを，実際に自分で制作した。

ウ　第３回

保護者向け講座

「子育てがもっと楽しくなる魔法の方法」

子どものやる気を高めるコツやポジティブになる言葉の使い方など，実際の子育てに役立つ方法を学んだ。

＜保護者の意見＞

・短い言葉でポイントをおさえた話で，自分の育児のキーワードになる教えをたくさんいただけた。

・リフレーミングの言葉かけでプラスの発想に転換できることを知った。今後は，良い言葉かけをしていきたい。

子ども向け講座

「楽しもうレクリエーション」

茨城県レクリエーション協会の指導員の方から，いろんなレクリエーションやクラフトアートなどを体験・製作して楽しく活動できた。

１歳から５歳までの子どもには託児を準備した。

(6)　成果と課題

＜成　果＞･･･プログラムを実施した事による成果

○　同会場同時刻に子ども向け講座を実施することで，保護者を参加しやすくした。

○　受講者はアンケートから，成果・満足度ともに「役立つ」,「良い」の評価が100％であった。

○　公民館にあまり行かない世代が公民館に出向くことで，公民館の活動を知り関心を高めた。

○　子どもへの接し方，親同士のコミュニケーションの取り方など，子育てに関する知識を身につけることができた。

○　大人向け講座については募集が少なかったため，新たに託児を設け，さらに「魅力的なチラシ作り」等の研修を受けた職員が改めてチラシを作成し，配付についても小学校の全児童に配付し直すと共に，新たに保育所・幼稚園等の子どもたちにチラシを配付したところ，参加者が大幅に増加した。

＜課　題＞･･･プログラムを実施しての問題点(浮き彫りになったもの)

●　夏休み中に親子で宿泊を伴うキャンプを募集したが，参加の申し込みがなかった。町の補助団体が例年実施している子ども向けの宿泊キャンプには申し込みがあることを考えると，保護者も同伴して宿泊させるプログラムについては企画，講座内容，会場の設備等を考慮し魅力的なものにしていく。

●　同会場同時刻に子ども向け講座を実施することで，保護者が参加しやすくなるようにした。平日の講座では多くの参加があったが，土曜日の講座ではあまり効果が出なかった。保護者向け講座申込者の子ども限定で子ども向け講座の申込みを受けることで効果が上がると思われる。

親子講座・子ども向け講座については，県各生涯学習センター事業「おもしろ理科先生派遣事業」「いばらきスクールサポート」及び「生涯学習ボランティア活動支援センター」登録講師等で様々な講師を派遣し講座内容を支援いたします。

例　・自然災害科学実験　・レクリエーション　・バルーンアート

・ダンス　・陶芸　・紙飛行機作り　・科学マジック　etc

●　広報の際，小学校だけでなく保育所・幼稚園等の保護者にもチラシを配付する。

●　就学前，低学年の子ども対象の託児を設ける。

●　分かりやすく目をひくようなチラシを作成する。

●　参加した保護者に対して，公民館や市民センター等での家庭教育支援にかかわる講座や活動の紹介をする。

※公民館・市民センター等の活性化を図るとともに，家庭教育に関しての学習プログラムの内容についても，さらに検討し普及活動に努めたい。

学習プログラム（笠間市 H29，常陸大宮市 H30）について

テーマ
B　発達障害児の理解と支援策のためのプログラム開発と普及策

1　モデルプログラム名（発達障害児の理解と支援）

発達障害のことをもっと知ろう

2　モデルプログラムに至る経緯(現状と課題)

○　近年，自閉症や ADHD，LD などの発達障害と診断される子ども，あるいはその疑いのある子どもが増えてきている。

●　学校の教員や，医療や相談事業の従事者は，発達障害についての研修を受ける機会があるが，一般的にはそういった機会が少ない。

3　モデルプログラムの目的

地域の人々が，発達障害について基本的な知識を身につけ，発達障害児に対して適切なかかわり方ができるようにすることで，二次障害(※)を防ぎ，発達障害児が最大限に能力を発揮することができるよう社会的環境を整えていくことを目的とする。

(※)発達障害児が，その特徴が周囲から理解されず，否定的な評価や叱責等の不適切な対応から，情緒不安定，反抗的な態度，深刻な不適応の状態等になること。

4　モデルプログラム展開例１（平成 29 年度笠間市実施）

(1) 対象者

発達障害児と関わっている方・関わる可能性がある方（教職員，民生委員，児童委員，青少年相談員，グリーンパトロール隊，交通安全母の会，市民の会，子ども会指導員，区長，寺子屋アドバイザー，スポーツ少年団指導者，放課後児童クラブ支援員，児童館スタッフなど）

(2) 開催時期・曜日・時間帯

休日（土日・祝祭日），午後

理由：平日仕事している方，出張許可が出にくい方，発達障害児との関わりの薄い職場の方でも参加しやすくするため。また，午後にすることで，休日に活動しているスポーツ少年団等の指導者の方も参加しやすくなる。

(3) 講座内容（単発実施が可能）

回	事業(講座)テーマ	時間	講師等	備考(準備物等)	経費	定員
1	発達障害とは 「こんな子どもに出会ったことはありませんか？」	2	専門的な知識や資格がある方（大学教授等）	配付資料	謝金 22,000 円 ＋旅費相当額	80 名
2	発達障害のある人への支援 その１ ～幼児期・学童期を中心に～	2	専門的な知識や資格がある方（大学教授等）	配付資料・付箋紙・模造紙・ペン等	謝金 22,000 円 ＋旅費相当額	80 名
3	発達障害のある人への支援 その２ ～思春期を中心に～	2	専門的な知識や資格がある方（大学教授等）	配付資料・付箋紙・模造紙・ペン	謝金 22,000 円 ＋旅費相当額	80 名

(4) 成果と課題

＜成　果＞･･･モデルプログラムを実施した事による成果

○　一般の方だけでなく，市町村主催の活動の指導者，青少年相談員，民生委員，児童委員等の参加者を得ることができた。

○　発達障害児を持つ保護者同士のつながりが生まれ，互いの不安感を減少させることができた。

＜課　題＞･･･モデルプログラムを実施しての問題点(浮き彫りになったもの)

●　一般の方も参加できるように休日に実施した。しかし，スポーツ少年団等の指導者も重要な対象であるが，休日，特に午前中は多くの団体が活動中であることから，これらの指導者が参加できる可能性は低い。

●　グループワークを取り入れた講座内容のため，定員をしぼった結果，抽選することとなった。

5　モデルプログラム展開例２（平成 30 年度常陸大宮市にて普及事業として実施）

(1) 対象者

発達障害児と関わっている方・関わる可能性がある方

(教職員，民生委員，児童委員，青少年相談員，市町村健康推進課職員，子ども会指導員，発達障害のある子を持つ保護者，放課後児童クラブ支援員，児童館スタッフ，特別養護老人ホーム職員，市町村社会福祉協議会職員など)

(2) 開催時期・曜日・時間帯

休日（土日・祝祭日），午後

理由：平日仕事している方，出張許可が出にくい方，発達障害児との関わりの薄い職場の方でも参加しやすくするため。また，昨年度と比較して１回の時間を１時間増やし，回数を３回から２回に減らすことで，昨年度と同じ内容を確保しながら，さらに参加しやすくなるようにした。

(3) 内容（単発実施が可能）

ア　第１回　「発達障害のある人への支援　その１　～幼児期・学童期の支援～」
「強度行動障害と支援方法」

100 名の参加希望があったが，当日は 84 人であった。臨床心理士である大野真裕先生を講師としてお迎えした。じゃんけんをして勝った人にストローを渡していくというアイスブレイクを行い，和やかな雰囲気でスタートした。

常陸大宮市社会福祉協議会との事前の打合せで，今回のプログラムには，「強度行動障害と支援方法」という内容を入れた。実態に合ったプログラムを入れることで，参加者も当事者意識をもって参加することができた。参加者のアンケート調査から，「今後の生活に役立ちそうですか」という質問には，「とても役立つ」，「役立つ」という意見が 100％となり，参加者にとって有意義な講座であった。また，感想から「近くの方と話し合いをする時間もあり，交流をもちながら，いろいろと意見を交わすことができて，有意義な時間でした。」

「仕事で障害のある方と関わることがあるため，参加させていただきました。とても充実した研修でした。ありがとうございました。」などの意見が挙がった。

イ　第２回「発達障害とは」

「発達障害のある人への支援　その２　～思春期の子たちへの支援～」

常磐大学大学院 人間科学科 教授 水口透先生をお迎えして，発達障害の概論を話した後，具体的な行動事例をあげながら，わかりやすく講義をしていただいた。

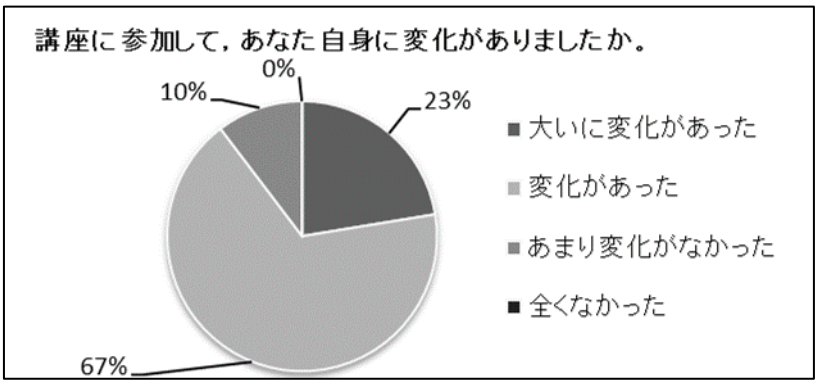
２回を含めた参加者のアンケートから，「本日のような講座で，発達障害の理解を深まりましたか」という項目では，98%の参加者が深まったと回答していた。感想としては，「いろいろな立場で関わっている方々のお話を聞く機会もあり，発達障害についてより身近に考えみることができました。水口先生のお話はたくさんの経験に基づかれて具体的でわかりやすかった。」とか「職場でのグレーゾーンの子に対する関わりについて，心配な言動もあり，その子への対応について日々考えることが多くなった。講座に参加して，自分の視野も広がりました。聞いたことで試したい事例もあり，早速実施してみたいと思いました。ありがとうございました。」という意見が挙がっていた。

(4) 成果と課題

＜成　果＞･･･モデルプログラムを実施した事による成果

○　本事例は市町村社会福祉協議会と連携して行った。そのため，一般の方だけでなく，市町村健康推進課職員，青少年相談員，民生委員，放課後子ども教室担当者等の参加者を幅広く得ることができた。

○　実際の事例を用いた講座の内容であったので，互いの悩みを共有することができ，発達障害児と接する方たち同士のつながりが生まれ，不安感を減少させることができた。



平成 30 年 11 月 11 日
参加者 71 人
アンケート結果より

＜課　題＞･･･モデルプログラムを実施しての問題点(浮き彫りになったもの)

● 一般の方も参加できるように休日に実施した。回数を減らすことで，多くの方に参加しやすくしたが，１回の講座時間を３時間にしたことで，講座の時間が長く，内容も多くなってしまった。定員，講座の回数や１回の時間設定についても，参加対象に合わせて検討していくことが必要である。

● 会場の大きさから定員を設定したが,参加希望が多く定員より 20 名程人数を増やしたが，参加希望者すべて応えることできなかった。また，専門的用語が多く初めての受講した方には，講座の内容が難しいようであった。講座内容を基本と発展に分けるなど，講座の内容を工夫していく必要がある。